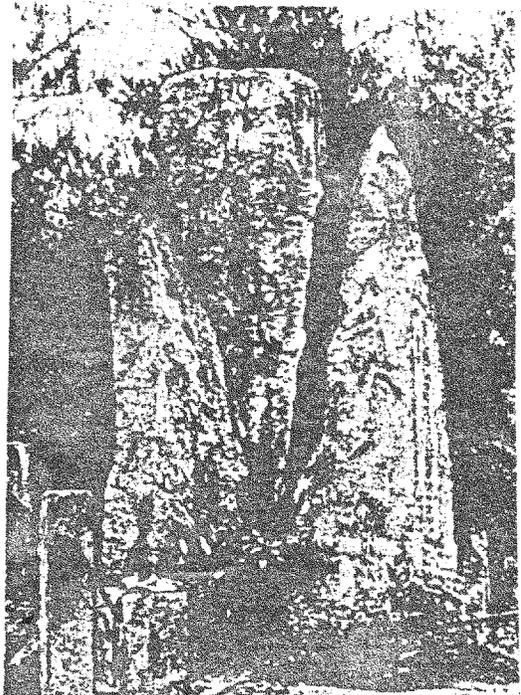


# 島田市北部の史跡を巡る 一歩一歩法会



H9. 6/1 (日)

信濃史探訪の会歴史民俗研究部会

講師 平田恵彦

# 広島市北部の旅-歩け歩けバス例会-スケジュール

9:00	福山駅北口	発
9:20	福山西IC	着
10:05	奥谷PA	着(トイレ休憩)
10:15	奥谷PA	発
10:25	広島東IC	着
10:30	木の宗山麓	着
11:45	木の宗山登山口	着
11:10	木の宗山遺跡	着
11:35	木の宗山遺跡	発
12:00	木の宗山麓	発
12:20	恵下山遺跡・恵下山城	着(昼食・トイレ休憩)
13:20	恵下山遺跡・恵下山城	発
13:45	両延神社	着
14:05	両延神社	発
14:25	熊谷氏居館跡	着
14:50	熊谷氏居館跡	発
15:10	伊勢ヶ坪城跡	着
15:40	伊勢ヶ坪城跡	発
16:20	不動院	着(トイレ休憩)
17:00	不動院	発
17:10	広島IC	着
18:10	福山東IC	着
18:30	福山駅北口	着

★時間の都合で両延神社を省略する場合があります。

# 弥生時代の青銅器

銅と錫の合金である青銅で製作された弥生時代の器具は、中国・朝鮮で製作された前期の舶載品（輸入品）と中期後半以降これを模倣した国産品がある。舶載品は九州以外での出土例は少なく、国産化によって各地に供給されたものといえる。九州においては、初期の青銅器は個人所有の宝器、権威・特殊な職能の象徴として埋葬の副葬品として現れるが、後には九州以外をも含めて祭祀用具（祭器）あるいは護符・呪符として、単独もしくは複数が埋納された状況で出土する場合が多い。

青銅器は器種によって分布範囲が異なり、九州を中心とした銅剣・銅矛分布圏と近畿地方を中心とした銅鐸分布圏は古くから指摘されたところだが、中国・四国地方はその接点であり、また瀬戸内海地域は平形銅剣の分布の中心地である。

県内で発見された弥生時代の青銅器は29点で、細形・中細形銅剣7、平形銅剣10（内7は現存せず）、中細形銅矛2、中細形銅戈1、鉄戈型銅戈1、銅鐸2（横帯文鐸1、袈裟襷文鐸1）、貨泉1、小型仿製鏡1、巴型銅器1、銅鏃3であり、その用いられた時期も中期後半以降である。

銅鐸や銅剣、銅矛、銅戈など武器形祭器は集落から隔たった山腹、丘陵の巨石の下から出土する例が多く、また単独例が多いが、広島市福田の木の宗山の銅鐸・中細形銅剣・銅戈、広島市可部町両延神社（諸延八幡社）境内の平形銅剣7、尾道市大峰山の中細形銅剣2・銅矛1、福山市熊野町の平形銅剣2のように複数の組み合わせの出土例がある。

一方、集落跡出土例では、広島市真亀C地点の住居跡からの出土小型仿製鏡があり、西山貝塚の巴型銅器は日常生活に関連した護符的存在である。また、福山市本谷遺跡は全国的に出土例のまれな「貨泉」出土地として知られ、箕島からは細形銅剣の破片（鋒部）が出土している。

今のところ県内に青銅器鑄造の痕跡を示す遺跡・遺物はなく、発見された青銅器はすべて九州・近畿など他地域から持ち込まれたものと考えられている。

# 木の宗山出土青銅器3点

国の重要文化財。昭和27年(1952)7月29日指定。光町清子氏所蔵。広島市東区安芸町福田の木の宗山中腹から出土した異種の青銅器、銅鐸・中細形銅剣・銅戈の各1点。銅鐸は横帯文（および邪視文=辟邪文）で高さ約19cm、中細形銅剣は長さ約39cm、銅戈は長さ約29cmである。

この3点の青銅器は、木の宗山の地権者の光町尽三郎氏が、明治24年(1891)、山の西端中腹（海拔約200m）の通称烏帽子岩の下から弥生式土器とともに発見したものである。

銅鐸・銅剣・銅戈が一緒に出土した例は全国でも唯一で、近畿を中心に分布する銅鐸と、九州を中心に分布する銅剣・銅戈が同時期のもの（弥生時代）であったことを証明する貴重な資料とされてきた。

木の宗山銅鐸は、銅鐸の分布の西限の出土例であり（従来の定説。近年佐賀県で横帯文銅鐸の鑄型の発見があり、九州製造説が提出され、有力視されている）、形態や特異な文様（横帯文、邪視文=辟邪文）から見て古段階の形式（外縁付き鈕式=Ⅱ式-2）のものである。

## 《参考》銅鐸の年代（吊り手の型式変化による分類）

最古段階	I-1式（菱環鈕式1式）	紀元前3世紀～前2世紀
	I-2式（菱環鈕式2式）	紀元前2世紀
古段階	Ⅱ-1式（外縁付き鈕式1式）	紀元前2世紀
	Ⅱ-2式（外縁付き鈕式2式）	紀元前2世紀～前1世紀
中段階	Ⅲ-1式（偏平鈕1式）	紀元前1世紀～後1世紀
	Ⅲ-2式（偏平鈕2式）	紀元後1世紀
新段階	Ⅳ-1式（突線鈕1式）	紀元後1世紀～後2世紀
	Ⅳ-2式（突線鈕2式）	紀元後1世紀～後2世紀
	Ⅳ-3式（突線鈕3式）	紀元後2世紀
	Ⅳ-4式（突線鈕4式）	紀元後2世紀
	Ⅳ-5式（突線鈕5式）	紀元後2世紀～後3世紀

# 木の宗山遺跡

広島市東区安芸町福田の木の宗山中腹にある弥生時代の青銅器埋納遺跡。青銅器が出土したのは標高413.1mの木の宗山の急峻な西南中腹の「金の段」と呼ばれる福田の狭小な盆地を一望する標高約260mの地点である。

ここに花崗岩の自然露頭である高さ5m、根元の長さ1.5mの巨石「烏帽子岩」があり、この前（南）方に接し、長さ1.5mの偏平な石と、長さ1.8m、厚さ40cm程度の比較的偏平な石が東西方向に置いてあって、西側の石の下から銅鐸、銅剣、銅戈各1、および弥生式土器と思われる土器が明治24年（1891）5月、神のお告げがあったという、地元の造り酒屋光町尽三郎氏によって発見された。

この石の下部には木炭交じりの土があり、石の西端下から土器、中央部下に鈕を東向きにしてほぼ水平に銅鐸が置かれ、これから約20cm東に剣、戈が鋒を南に向けて並べてあったといわれる。大正2（1913）に谷井濟一氏によって『考古学雑誌』に紹介されて以来、広く知られるようになった。

銅鐸は高さ18.9cm、裾径9.7cm×7.8cm、重量470gの小型のもので、光沢を帯び黒色に近い。鋸歯文を鰭部、外縁にもつ外縁付き鈕式2式（Ⅱ-2式）で、鐸身を3条の横帯によって上下2段に区画する横帯文銅鐸である。横帯は上から斜格子文、半円重弧文、複合鋸歯文+綾杉文であり、上段には眼を表現したような杏仁様の重圏文を左右に並べ、その中を渦文、半円重弧文、下部は雲形文、双渦文などを配している。

とくに眼を思わせる文様から「邪視文鐸（最近、春成秀爾氏が「辟邪文」と呼ぶことを提唱している）」と呼ばれ、全国から出土している多くの銅鐸の中でも著名なものの一つである。

銅剣は中細形銅剣で、全長39cm、鋒部を欠失し、また、中ほどで二つに折損している。板状偏平化した身が特徴的である。銅戈は中細形銅戈（いわゆるクリス型銅戈）で、全長29cm、関幅9.3cm、これも二つに折損している。身の中央左右にある一对の樋の中には綾杉文が鑄出されている。鋒部は両側とも湾曲し、二次的な火を受けたかのようである。

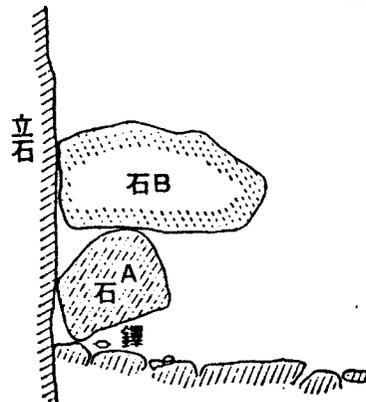
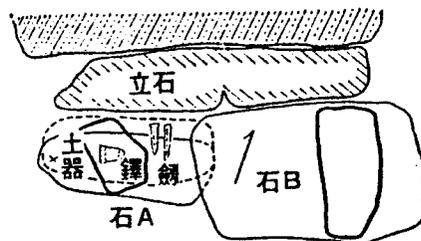
銅剣・銅戈とも九州で製作されたものと考えられ、現在まで異論がない。一方、銅鐸は従来近畿地方を中心とする地域で製作され、木の宗山銅鐸はその最西端の例とされてきた。ところが、近年、横帯文の鑄型が佐賀県安永田で出土し、九州でも銅鐸が作られていたことが確実になった。これにより木の宗山銅鐸も九州で製作された可能性が高いとの新説が提出され、現在ではこちらの方が有力視されている。

これは私見だが、昨年、島根県の加茂岩倉遺跡から39個という大量の銅鐸が出土し、その中の一部には出雲で製作されたものと考えられるものがある。出雲には宍道町から出土したと伝えられる邪視文鐸が宍道町菟古館にある。中国地方ではほかに岡山市足守でも邪視文鐸が出土しており、瀬戸内と出雲との関連も今後の検討課題として残しておくべきだろう。

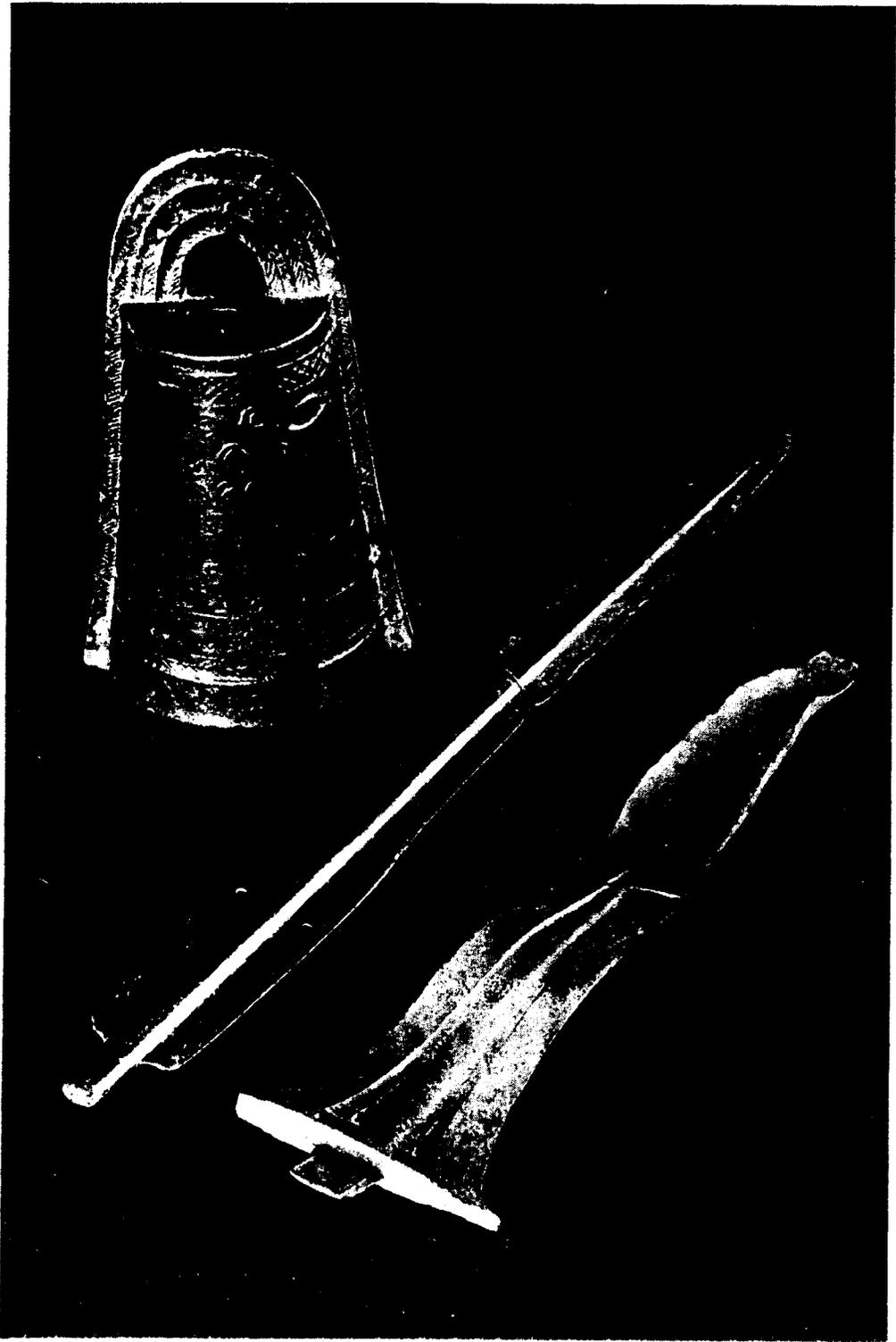
銅鐸・銅剣・銅戈とも祭祀用具であり、具体的には豊作を祈念し、害虫・害獣を追い払う農業祭祀が想定されているが、祭祀期間以外は目立つ場所に埋納して保管する意義があったのか、社会の変革によって農業祭祀自体が意義を失い、巨石の根元に埋納されたものか、意見が分かれている。

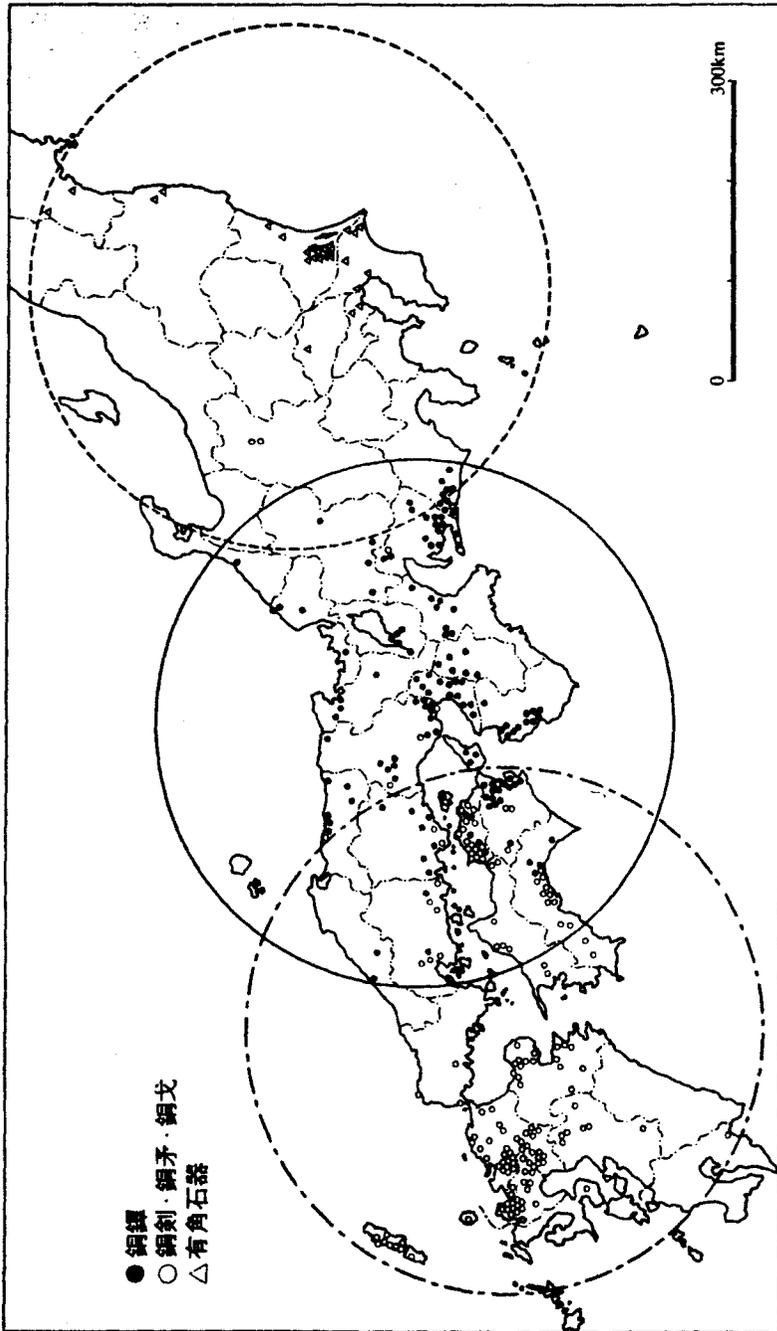
同時に出土した土器は出土時には遺棄されたので、明らかでないが、銅剣・銅戈の製作年代からして、弥生時代中期後半以降に用いられたものと思われる。

銅鐸・銅剣・銅戈3種の青銅器が共伴する全国で唯一の例であり、山腹の巨石下の青銅器祭祀用具埋納という点でも特徴的で、木の宗山出土青銅器は一括して昭和27年(1952)に国の重要文化財に指定されている。



木の宗山遺跡スケッチ(『人類学雑誌』41の4 森本六爾氏報文より)





弥生時代の三つの地域(小林行雄一九五九を改変)

この有名な図は、作成者の意図に反して、誤解を招きやすい。中央が銅鐸をもつ地域、両側が銅鐸をもたない地域だという、それ以上の意味をもつものではないのに、銅鐸の地域と銅矛・銅剣・銅戈の地域の対立を主張しているかにみえる。

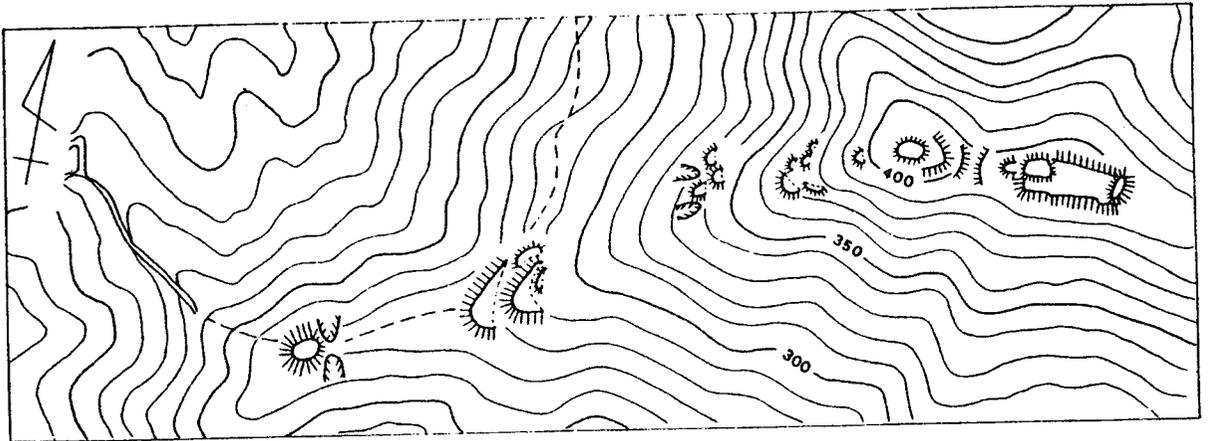
## 〈参考〉木の宗山城跡

銅鐸出土地から尾根に出て山頂（標高413.1m）まで行くと、そこが木の宗山城である。山頂の郭は空堀をはさんで西に2郭、東には4郭があり、一部土塁も残っている。また、最高所の郭には石垣が残存している。

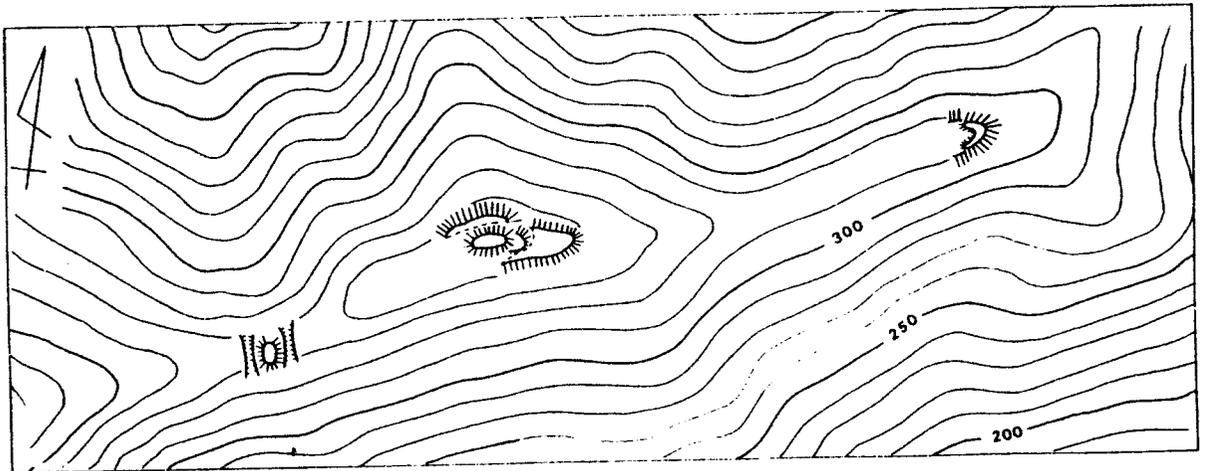
郭は標高210mあたりから頂部にかけてほぼ東西方向に配置されており、全体で25ある。これらの郭配置から山頂郭群（6郭）・東側郭群（6郭）・西側郭群（13郭）の3群に分けられる。

木の宗山の西を除く3方向は小河原川・三篠川に囲まれ、天然の濠を形成している。郭は広範囲に分散しているが、大規模な山城である。

この山城は『芸藩通史』に吉川興経が築いたとあるが、それより古くに奥西綱仲が在城し、吉川氏が修復して天文19年（1550）まで使用したと考えられる。



木の宗山城跡山頂郭群、西側郭群略測図 (S=1:4,000)



木の宗山城跡東側郭群略測図 (S=1:4,000)

## 両延神社 (りょうのべんじや、諸延神社、白石山八幡宮)

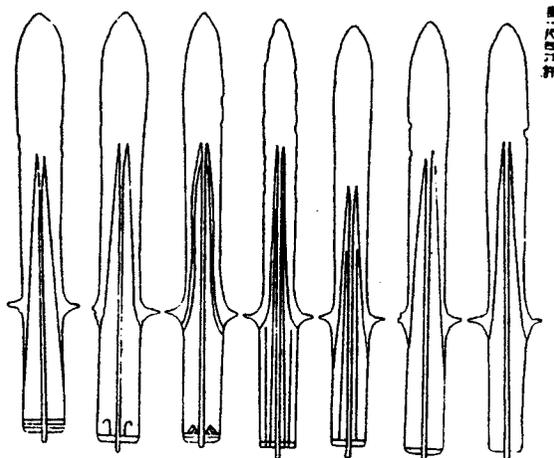
広島市安佐北区可部町大毛寺にある。近世には白石山八幡宮と呼ばれた。「芸藩通史」によると、建久元年(1190)武田朝信が宇佐から下四日市村(可部町)に勧請したのを、武田信時が建長5年(1253)現在地に移したという。しかし、社家である末田家の社伝では、以前から可部荘の総鎮守として鎮座していたのを、武田氏が一時総社(下四日市)に祀った後、現在地に遷座したとする。いずれにせよ、中世には安芸国守護武田氏の庇護を受け、当地方屈指の大社として繁栄した。

武田氏滅亡後、永禄11年(1568)、聖護院道澄親王筆の額を得、文禄3年(1194)には神田3町を寄進された(寄進者不明)というが、社殿は荒廃していったため、宝永3年(1706)に近在12カ村の氏子らが社殿を造営した。幕末には拜殿、御旅所、宝蔵のほか9社の境内社があった。

明治6年(1873)郷社に列せられ、両延神社と称した。祭神は応神・仲哀天皇など4柱。例祭は10月29日である。

この両延神社からは江戸時代に銅剣7本が出土している。

寛政9年(1797)に出版された藤井貞幹著『好古日録』によれば、「安芸国諸延神社ノ祠ノ境地銅器数枚ヲ掘出ス其形大同小異皆鑄造スル者也古昔所謂鋒鋒ナリ」と記され、図も掲載されているので江戸時代に出土したことは確実だが、残念ながら現物の所在は不明である。



可部町白石山諸延八幡出土平形銅剣

## 〈参考〉黒川遺跡

世羅郡世羅西町黒川の弥生時代の銅鐸出土地。美波羅川の開折した盆地形の低地に向かって開いた谷の東向き形斜面、標高380mにあり、周辺は水田である。

昭和36年(1961)3月、農道工事の際に、地表下60cmのところに長さ1.2m、幅1m、厚さ47cmの花崗岩の巨石が現れ、この巨石の下から2個の石にはさまれた状態で銅鐸が発見された。銅鐸は鈕を山手に向けてやや斜めの状態にあったという。

銅鐸は高さ28cm、裾幅14.2cm、重さ890g、<sup>ひ</sup>鐸の一部および鐸身の一面の3分の1が欠損していて、割れ口の状況から出土時の破損もあるが、大部分は埋納時にすでに欠損していたと推定されている。

鐸部に鋸歯文、鈕に綾杉文を配し、鐸身は斜格子文帯で縦横に4区画し、最下段に鋸歯文を配している。内面下部に内凸帯をめぐらせ、舌によって摩耗している。また、鑄造時、内型を支えた型もたせの孔が10カ所ある。典型的な偏平鈕式4区袈裟禪文銅鐸で、県内の銅鐸出土例は木の宗山遺跡に次いで2例目で、備後では唯一の例である。

当時地表に露出していたと考えられる巨石の下という状況も当時の祭祀用具埋納の性格をよく示しているといえる。

## 〈参考〉大峯山遺跡

尾道市久山田町大峯山中腹の弥生時代青銅器埋納遺跡。

昭和35(1960)標高289.6mの大峯山の6号目付近、標高220mの南側傾斜面の岩塊の石材切り出し作業中に銅矛1、銅剣2が出土した。折り重なっている礫塊下の1.5m×1.8m、高さ5mの直方体の巨石の下、この巨石を支えていた高さ60cm、幅1.2mの三角形の石の根元、石の側面に沿って斜めに置かれた銅矛と水平に置かれた銅剣があったといわれる。また、5mほど下がった岩塊の間から弥生時代後期初頭の土器片が発見されている。

銅矛は全長66cm、黒緑色の中細形銅矛で、<sup>さつさき</sup>鋒部から43cmのところ<sup>しのか</sup>に鑿が  
あって最大幅 6.3cmとなっており、この部分の中央に鑿が通っている。刃  
も研ぎ出され、高い背の両側の樋も鋭い。長さ13cmの部分が中空の袋部  
には目釘穴状の小孔があり、袋部下端の一方にある環鈕も孔が小さく装飾化  
している。

銅分が多いためか地金が軟らかく全体にひわりが大きい。銅剣は2口と  
も中細形銅剣で、一つは鋒から31.5cm長さの剣身の部分と、2cm長さの茎  
の末端から13cmの部分であり、このまを欠失している。鋒部から26.7cm、  
刃の部分の左右に刺状の突起を作り、これと同じ背には鑿がない。関から  
4cmのところ<sup>しのか</sup>に左右の円孔がある。他のひとつは鋒先部の長さ18cmの部分  
のみで、やや幅広である。

いずれも弥生時代中期後半以降九州で製作されたもので、祭祀用具とし  
て利用され、埋納されたのは弥生時代後期前半ごろであろう。

中細形銅矛と中細形銅剣を埋納もしくは副葬する例は九州以外では例が  
無く、遠くから眺望できる山の中腹の岩塊から、祭祀用具である青銅器を  
埋納することは当時の山岳信仰の一端を示しているのではないかと推察さ  
れている。

## 安芸熊谷氏

安芸熊谷氏は三入荘（広島市安佐北区可部町）の西遷地頭・国人領主で、  
武蔵国熊谷郷（現埼玉県熊谷市）を本貫としている。

熊谷直国は承久の乱の際、瀬田（滋賀県）で討ち死にし、その子直時は  
恩賞として承久3年（1221）三入荘地頭職<sup>みいりのしょう</sup>に補任<sup>しま ぶじん</sup>された。しかし、弟祐直  
の成長により所領の配分が問題となったため、幕府は文暦2年（1235）に  
直時に3分の2、祐直に3分の1の割合に分けるように裁許した。だが、  
その配分が杜撰であったため文永元年（1264）に幕府の命令で直時に所領  
を三分割させ、祐直にその一つを選び取らせることになった。ここに三入

荘も直時の本城方と祐直の新庄方に分けられた。以後、本城方は伊勢ヶ坪城、新庄方は桐原之<sup>とけ</sup>城に寄り、庶家を分立させていった。

鎌倉時代末期から南北朝期の内乱で、蓮覚や直清をなど一部を除けば、惣領が庶氏を引き連れて幕府方として戦い、守護武田氏・今川氏の旗下に従った。その結果、本庄方の直経、新庄方の直氏・直平などに多くの恩給があった。

また、直経は幕府の権威を背景に貞和3年(1347)細分化されていた本庄方の統合を終え、貞治4年(1365)その所領をすべて嫡子宗直に譲った。ここに三入本庄の単独相続が始まった。明德2年(1392)には、近隣の領主と対抗するため、本庄方と新庄方が一族一揆を結んだ。ところが、宗直から5代後の磨直の時、本庄方は新庄方を滅ぼし、三入荘を独占した。

応仁の乱以後も熊谷氏は安芸守護武田氏の旗下にあった。しかし、元直が永正14年(1517)の有田城合戦で武田元繁と共に討ち死にし、また毛利元就の強い働きかけがあったため、信直は天文2年(1533)以前に武田氏を離反し、毛利氏に服属した。信直はまた、それまでの本城であった伊勢ヶ坪城から峻険な高松城に移った。

熊谷氏は以後毛利氏の領国拡大のために軍忠を励んで多くの所領を得た。その地位も国衆の一人として、客分の処遇から元就の晩年には信直は毛利氏の政策決定に参画するまでになった。

なお『八箇国御時代分限帳』によると、所領は嫡流の元直のみが本領一帯を一括領有し、庶家分は領国に分散していった。そして嫡流の熊谷氏も慶長5年(1600)関ヶ原の戦い以後毛利氏に従って萩へと移った。

## 〈参考〉安芸武田氏

鎌倉・室町時代の安芸(分郡)守護。清和源氏。

新羅三郎義光の子義清が甲斐国(現山梨県)に土着し、義清の孫信義が武田村に住んで武田姓を称した。信義の弟信光が承久の変で軍功を立て安芸国守護職を得た。

武田氏は鎌倉時代を通して守護職にあったわけではないし、常時在国してもいなかったが、とくに佐東・安南郡方面では中小の地侍や在庁官人を家臣化し、荘園・国衙領を横領して支配の基礎を固めていった。こうして鎌倉時代の信宗の代には佐東銀山城を築いていた。

足利尊氏の挙兵の際、信武は安芸国にいてこれに応じ、国内の武士を率いて上洛し、以来子の氏信とともに終始足利方として各地を転戦した。信武のあと長男信成が甲斐守護職、次男氏信が安芸守護職をそれぞれ継承した。しかし、氏信が応永元年（1368）守護職を改替されて以来、代々足利一門が安芸守護職を歴任し、ついに同職が武田氏に戻ることはなかった。

ただ、本拠佐東郡の守護職が応永4年（1397）以前に幕府から認められたと考えられるほか、安南・山県両郡も永享（1429～1440）ごろまでには守護権限が公認され、いわゆる分郡守護として安芸国中央部を支配した。

武田氏の家臣には佐東郡の品河・香川・川之内海賊衆、安南郡の白井・戸坂・温品、安北郡の熊谷・山中・小河内、山県郡の吉川・壬生らの諸氏がおり、一族も伴・国重両氏のように銀山城近辺に根を下ろして在郷名を名乗り、家臣団化していった。

室町時代には、勢力を東に伸ばしていった防周の大内氏との対立が深まり、長禄元年（1457）、大内氏と結ぶ厳島神主（藤原）家との所領争いを契機に銀山城の麓で大内軍と武力衝突をみた。

応仁・文明の乱（1467～1477）では大内氏との対抗上、武田氏を支援してきた細川氏の東ぐん参じたが、一族の元綱は西軍に寝返った。文明13年（1481）ころ国信は大内氏、元綱と和解したが、明応8年（1499）温品氏が反逆したため再び大内氏との関係が悪化した。

大内義興を頼って山口に下向した足利義尹が將軍職回復を訴えた際、当時、当主であった元信は一時その誘いに応じたが、結局幕府に帰順し、安芸国を離れて永享12年（1440）以来守護職のある若狭国に下った。元信の従兄弟元繁は元信が大内方を離れた後も大内氏と結び、安芸分郡経営にあたった。ここに国信系の若狭武田氏と元綱系の安芸武田氏とが完全に分立することになった。

元繁は義興に従って上洛していたが、永正12年(1515)突如、反大内の兵を挙げた。だが、2年後の永正12年(1515)10月22日、毛利元就の初陣となった有田城合戦の中井手の戦いで熊谷元直が戦死し、次いで元繁も又内川畔で敗死(矢にあたって落馬したところを井上左衛門尉に討たれたという)。以後、武田氏の勢力は衰え、毛利の工作もあって熊谷氏が離反。しかし、大内氏のたび重なる佐東侵攻に対しては、川之内海賊衆の活躍や尼子氏との連携によって踏み堪えていた。

ところが、天文10年(1541)の郡山合戦で、尼子軍が大敗したと聞いた信実(元直の子)は銀山城を棄てて逃げたといわれる。家臣らは主のいなくなった銀山城にたて籠って2ヶ月抵抗したが、大内・毛利両軍の前に同年5月ついに落城した。この時、討滅を免れた一族の伴氏も翌年謀反を企てたが、毛利氏に討たれ、安芸武田氏は完全に滅んだ。

## 伊勢ヶ坪城(塩ヶ坪城)

広島県史跡。昭和40年(1970)1月30日指定。

広島区安佐北区可部町大林にある中世山城で、別名を塩ヶ坪城という。

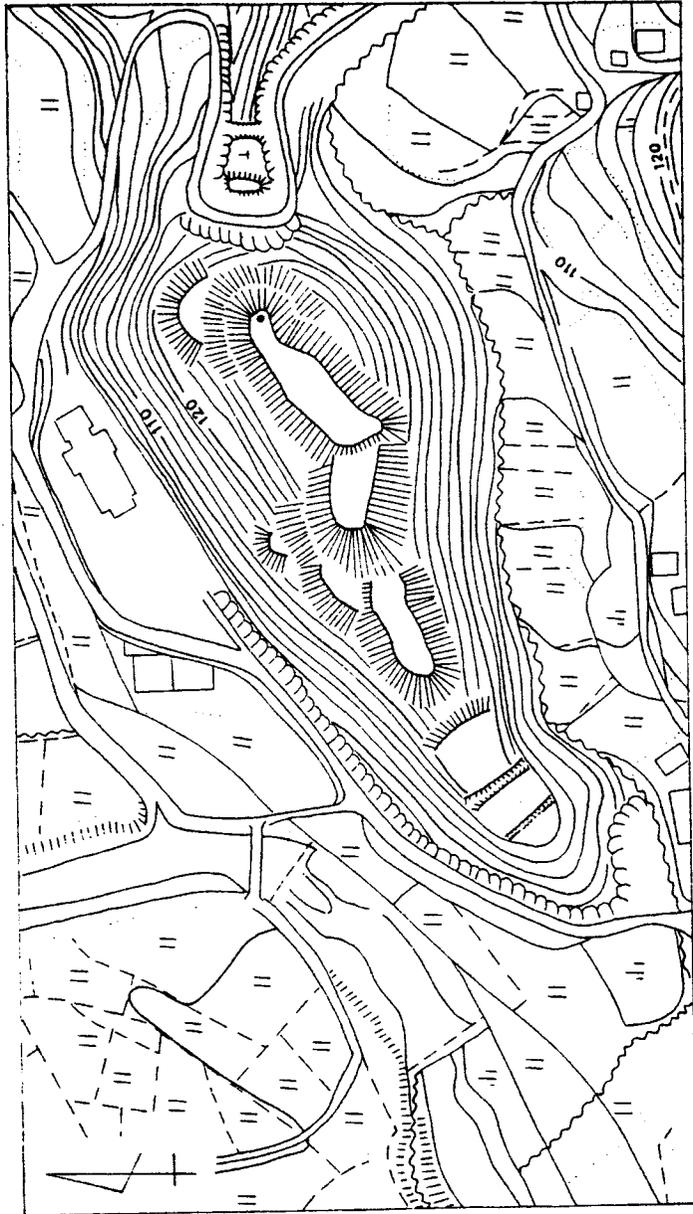
武蔵野国熊谷郷(現埼玉県熊谷市)にいた熊谷直国は、承久の乱の時、瀬田で戦死したが、その功によって子直時は三入荘地頭職に補任された。その直時が拠ったのがこの伊勢ヶ城である。

弟祐直の成長により文暦2年(1235)三入荘を2:1に分割し、祐直は別に桐原之城を構えたが、伊勢ヶ坪城は惣領家の居城として戦国時代初期に信直が三入高松城へ移るまで続いた。本拠が移った後、伊勢ヶ坪城は隠居城として使われた。

遺構は根谷盆地の北部に位置する大林八幡宮のある小丘上にある。

主郭(上の段)の東側は東から延びてくる尾根を2本の堀切で断ち切っている。主郭から南西に延びる尾根に沿って階段状に連続する4つの郭と、主郭のすぐ東に出丸と思われる郭(後の段)がある。主郭と後の段の間は現在、舗装路となっているが、大堀切であったと思われる。主郭の東北端

には井戸跡があり、主郭の南西下の郭には長さ20m、高さ1.1m~1.5mの石垣が見られる。西側は根谷川を天然の外堀として利用している。



伊勢ヶ坪城跡略測図(S=1:2,000)

どいやしき  
**土居屋敷跡**

広島市安佐北区可部町下町屋 県史跡 (1970年1月30日指定)

現状 畑, 保存状況 良好, 立地 平地, 標高46m, 比高 1m

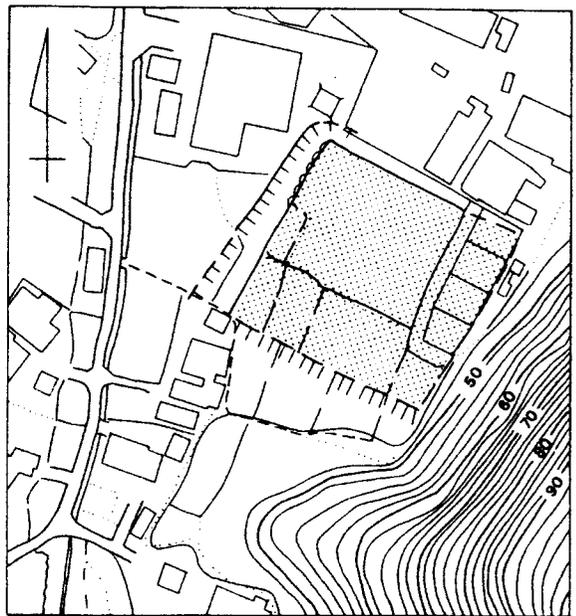
史料 「芸藩通志」巻74

参考文献 「日本城郭大系」, 「山城」, 「可部地方における中世城郭の実態」

**概要**

現在, 巨石を使用した石垣が南北方向に約30m残っている。この石垣が門から北側部分の範囲を示すと思われるので, 門幅を2~3mとすると, 屋敷内部の規模は約60m四方に復元できる。また, 屋敷の西と南の土地区画からは堀跡が復元できるので, 北側にも堀が巡っていたことが推定される。

本屋敷跡は, 熊谷氏が伊勢カ坪城から高松山城へ移った頃築かれたといわれる。



土居屋敷跡略測図(S=1:2,000)

## 三入荘 (みいりしやう)

広島市安佐北区可部町にあった荘園。保元3年(1158)の文書に「三入保」と見えるのが史料上の初見で、この時は石清水八幡宮領であった。

永暦元年(1160)後白河院が紀伊国(和歌山県)熊野権現を新熊野社として京都に勧請されると、まもなく同社に寄進された。荘域は下町屋以北  
とけ

の根の谷、および桐原などの支谷を含む地域で、嘉禎元年(1235)当時、田55町余、畑20町、栗林6町余のほかに地頭・公文・惣追捕使・散使などの荘官の給田が計4町あった。

年貢は佐東川(大田川)の舟運で河口近くまで運ばれ、いったん佐東倉敷という倉庫に保管され、内海航路の大型船に積み替えられられて京都に送られていた。

承久3年(1221)関東武士の熊谷氏が三入荘地頭職に補任された。それ以前にも地頭がいたことは明らかだが、名前はわかっていない。文暦2年(1235)に直時と一族の祐直が争い、祐直に三入荘3分の1に分割し、境界に勝示(杭)を竊って両者の領域を確定させた。以後、直時の支配領域は本庄(本荘)、祐直の支配領域は新庄(新荘)と呼ばれるようになった。本庄は大林・桐原・、新庄は上町屋・下町屋にあたとされていた。正安元年(1299)には本庄下方下村が下地中分され、新熊野社は田8町を除く地の支配権を失い、元徳3年(1331)には公文以下の荘官の給田も地頭の知行するところとなり、鎌倉時代末までは同荘の支配実権はすべて熊谷氏の握るところとなり、室町時代以後、同荘の年貢が新熊野社に納入された形跡は見当たらない。

鎌倉時代の荘内には、八幡宮・大歳神・崇道天皇(熊谷氏屋敷神)・新宮・今宮・山田別所・若王子などの神社や、集福寺・蓮華寺などの寺院があった。また、町屋には市場が形成されていた。

## 恵下山遺跡 (えやまいせき)

広島市安佐北区高陽町玖にある弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての集落跡。住宅団地造成にともない、昭和48年(1973)に県教育委員会によって発掘調査されたが、重要な遺跡であることから検視園として保存し、住宅団地内の史跡公園として活用されている。

遺跡は大田川東岸の低級領上に有り、円形の竪穴住居址5棟と土壇4基からなる。竪穴住居は径6m前後の中規模のもので、柱穴は6~8本と多く見られる。土壇は径1.5m前後の袋状土壇で、内部に遺物を持つものが多い。これらの住居址と土壇は互いに関連をもって2~3棟を1単位をとした小単位の集落があったことが考えられている。

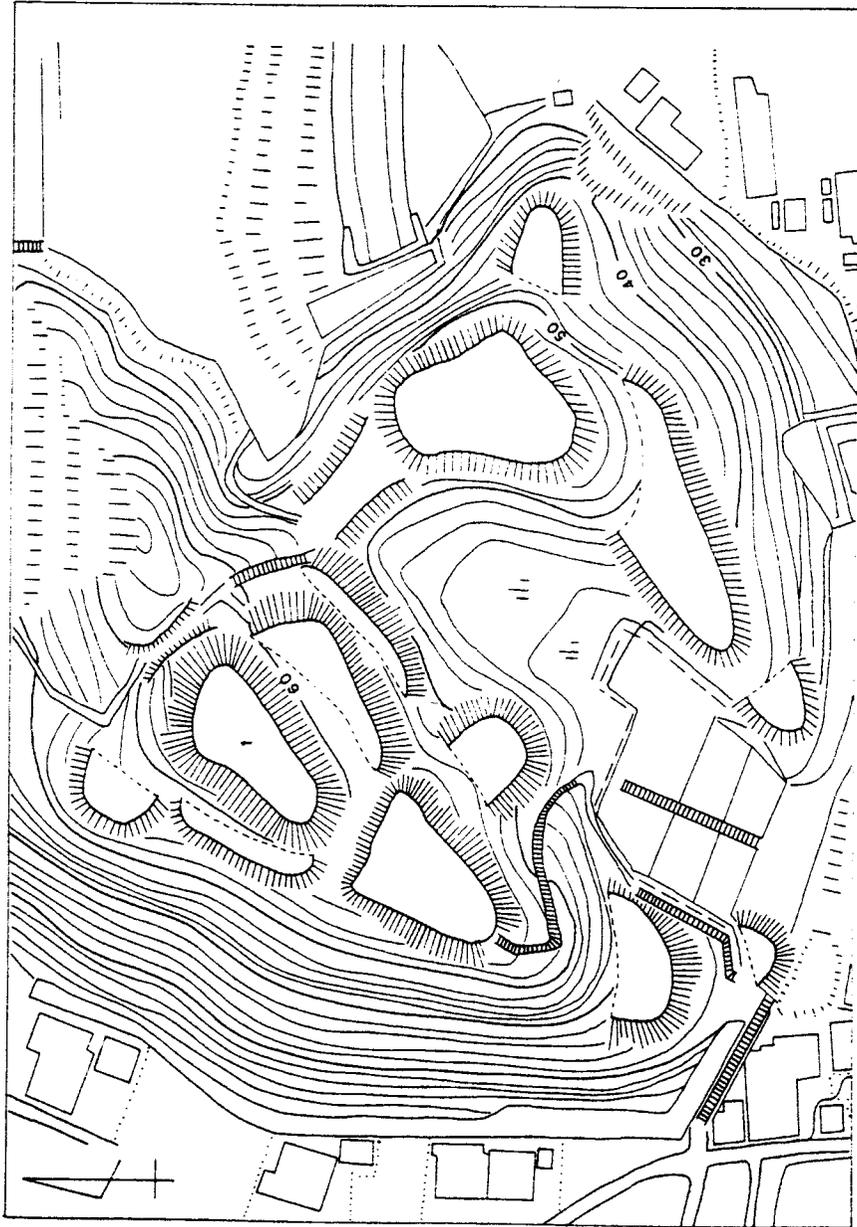
なお第1号住居址は上屋が復元され、第2号住居址は遺構面を持ち上げて復元し、遺構の発掘と復元が関連づけて理解できるよう工夫がなされており、県内の遺跡の保存整備の新しい試みの一つとして注目されている。

## 恵下城跡

広島市安佐北区安佐町飯室にある中世の山城跡で、宅地造成にともない、昭和52年(1977)に県教育委員会が発掘調査を行なった。

城跡は鈴張川東岸の丘陵地にある比高約55mの丘陵先端部を利用したもので、背後を2条の堀切で区切り、中央部の主郭を中心に6つの郭と堀切、竪堀を輪状に配している。主郭は築城の時、盛土を柵、石垣で補強したもので、掘立柱建物2棟と礎石建物1棟が明らかにされている。周囲の郭にも柵列や通路など細かな加工が見られ、輪状をなす郭配置とともに一つの特色になっている。

出土遺物には土師質土器皿、坏、備前焼摺鉢などがあり、室町時代のものとされている。なお、城主については『芸藩通史』などに遠藤氏、三須氏などがあげられているが、彼らは安芸国守護武田氏あるいは有力国人であった熊谷氏に関わりの深い人物で、戦国時代に活躍しており、発掘調査の成果と一致する。



惠下山城跡略測図 (S=1:2,000)

## 山手遺跡群

広島市安佐北区高陽町玖にある遺跡群で、住宅団地造成に伴い昭和47年(1972)に発掘調査されたが、遺跡の重要性により隣接する恵下山遺跡群とともに県史跡「恵下山・山手遺跡群」として指定されている。

遺跡群は太田川東岸に広がる標高50m前後の低丘陵の先端に位置し、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての住居群と古墳からなる。

住居跡は6棟ある。いずれも中央に炉をもつ竪穴式住居跡で、隅丸方形をなすが、4本柱で一辺5.5m~6.5mの大型のものと、5本柱で一辺が約4.5mの小型のものに分かれている。これらの切り合い関係から2時期以上に分かれる小集団であったことが推定されている。

住居跡内からは弥生土器の壺、甕、鉢、砥石などが出土している。古墳はいずれも墳丘が削平されていたが、主体部が礎床をもつ木棺の第1号古墳と、木棺直葬の第2号古墳の2基があり、特に后者では細尾根を切断して方墳状に削り出す手法が見られた。第1号古墳からは鉄剣が出土しており、6世紀前半以前のものと考えられている。

## 不動院(安芸国安国寺)

広島市東区牛田新町にある真言宗寺院。開基は空<sup>くう</sup>窓<sup>そう</sup>と伝えられる。本尊薬師如来座像(国重文)が平安時代の作であることなどから考えて、創建時期は相当古いと思われるが不詳、当時の宗派も不明である。

暦応年間(1338~42)に足利氏が国ごとに安国寺を設置したとき、安芸ではこの寺が安国寺に充てられた。康暦2年(1380)ごろには景陽山安国寺と称し、臨済宗東福寺(京都市)の末寺となっていた。その後、大永年間(1521~28)に兵火に遭って衰退していった。

荒廃したこの寺を復興したのが有名な安国寺恵瓊で、現存する建物はほとんどが恵瓊の創建・復興による。恵瓊は使僧、政治家として活躍する一方、安国寺住持として金堂(国宝)・鐘楼・楼門(国重文)などを創建・移築

した。天正19(1591)秀吉から寺領として知行1万1500石が安国寺に与えられた。

恵瓊の死後、福島正則の祈祷師宥珍<sup>ゆうちん</sup>が入り、真言宗に改め、宥珍が奉じた不動明王にちなんで不動院と呼ばれるようになった。他に梵鐘(国重文)・仁王立像・不動院文書(国重文)などがある。

## 不動院金堂

国宝1棟。昭和33年(1958)2月8日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所有。

桁行<sup>けたゆぎ</sup>3間、梁間<sup>はりま</sup>4間、一重、裳階<sup>もこし</sup>付、入母屋造、柿葺。この建物は現存する禅宗様の建築物としては規模の大きい遺構で、大内義隆が周防山口に建てたものを政僧恵瓊が移築したと伝えられ、中世の本格的な仏殿の規模をうかがえる。

正面一間通りを吹き放しとした手法は禅宗様建築には珍しく、大陸的手法と考えられる。手挟や海老虹梁、大瓶束を数多く使った架構や彫刻など、細部まで巧みに作られた繊細な禅宗様手法を用いながら、全体には雄大な気風がうかがわれる建物である。天井の絵は天文9年(1540)の賛があり、この建物もその頃の建築と考えられる。恵瓊が移築したのは間違いのないところだろう。

## 不動院鐘楼

国重要文化財1棟。昭和27年(1952)7月19日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所有。

桁行3間、梁間3間、袴腰付、入母屋造、柿葺。

白壁塗りの袴腰付鐘楼で、各部の釣り合いがよく整った外観をしている。細部は和様三手先の組物をしているが、軒は二軒扇柱で、隅木も禅宗様の手法をとっているのは珍しい意匠である。永享5年(1433)の墨書銘があり、創建年がわかるが、一度移転した痕跡がある。

## 不動院の銅製梵鐘

国重要文化財1口。明治32年(1899)8月1日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所蔵。

総高108.3cm、口径65cm。この梵鐘は重要文化財に指定されている不動院鐘楼にかかっており、毛利・豊臣両氏に信頼の厚かった安国寺恵瓊が朝鮮半島から将来したものと伝えられ、笠形上に単頭式の龍頭と角を立てた朝鮮鐘である。

両肢を踏ん張り、首を曲げて笠形上の宝珠を噛む龍頭は形式的な硬さがあるが、精巧な作である。鐘身部葉巻の強い唐草文、単弁蓮華文などの文様で飾り、下半部の四方には、各1軀の天女が天衣をなびかせて雲上を舞う姿が刻まれている。乳は3段3列の9個が四方にある下帯に近い低位置に、蓮華文の撞座<sup>つぎ</sup>が鑄出されている。撞座の蓮華中央に円光を負った菩薩座像と、その左右に「信相菩薩」の銘が刻まれている。

## 不動院楼門

国重要文化財1棟。昭和33年(1958)5月14日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所有。

3間1戸2階2重門、入母屋造、本瓦葺。この楼門は、寺伝によると安国寺恵瓊が朝鮮半島から持ち帰った木材で建てたといひ、上層の尾垂木に「朝鮮木文禄三」の刻銘があるので、文禄3年(1594)の建立とも考えられるが、細部に室町末期の様式手法が見られるので文禄のは修理とも考えられる。この時代の建物として、ほとんど和様を交えていないのは珍しい。

## 不動院の木造薬師如来座像

国重要文化財1軀。大正6年(1917)8月13日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所蔵。

像高140cm、膝張136cm、寄木造。円満な面相に流麗な衣紋の定朝様の作品で、金堂の本尊である。脇侍の日光・月光菩薩を欠いているが、檜材で

漆箔塗りの平安時代初期の作品である。

台座式茄子の獅子裏に「宝徳二年十月日」などの朱書銘があり、宝徳2年（1450）に修理されたことがわかる。

## 不動院文書

広島県重要文化財4巻。昭和38年（1963）4月27日指定。

広島市東区牛田新町3-4-9。不動院所蔵。

文書は、前身である安国寺の住持で、毛利輝元、豊臣秀吉の信任を受け、政治的にも活躍した恵瓊の活動や寺の隆盛を示すものと、広島入部後の福島正則の不動院充て書状で、全24通を4巻の卷子本にしている。付として寺の由来と雑記の2冊と併せて指定されている。

1巻は秀吉朱印状1通で、天正19年（1591）3月、秀吉が安国寺に1万1500石の知行を与えた目録である。寺院の待遇としては異例の恩典で、恵瓊の権勢を知ることができる。1巻は恵瓊関係の書状16通で、戦乱の時代に敏腕を発揮した恵瓊の外交手腕を示すものである。1巻は福島正則関係の文書4通で、正則の祈祷師で新住職になった宥珍への書状のほか、門前に91石5斗の領地を許す宛行状などである。残り1巻は毛利輝元書状写しなど3通である。

## 安国寺恵瓊（あんこくじけい）

生年不詳～慶長5年（1600）10月1日。

安土桃山時代の臨濟宗の僧・戦国大名。瑶甫と号し、一任斎、正慶ともいう。安芸国に生まれ、佐東銀山城主武田信重の遺児と伝えられる。天文10年（1541）武田氏滅亡の際、逃れて安芸安国寺（現在の真言宗不動院〔広島市、当時は臨濟宗東福寺末寺〕）に入り、天文22年（1553）東福寺竺雲恵心の弟子となる。

恵心は毛利氏の帰依を受け、京都との連絡や尼子氏・大友氏の和平交渉に奔走していたが、恵瓊も師と同様に使僧として活躍するようになり、毛

利氏の信任を得、安芸・備後両国の安国寺の住持となる。

元龜元年（1570）ころからたびたび上京し、天正元年（1573）には足利義昭と織田信長の争いの中、義昭のために奔走した。この間天下の情勢を見抜き、信長の天下の短いこと、秀吉の有望さを予言したことはあまりにも有名である。

天正4年（1576）毛利・織田両氏が戦争状態に入ると、恵瓊は備後鞆（福山市鞆町）の安国寺を拠点として活動するようになる。天正7年（1579）東福寺退耕庵主となり、全国の情勢に通じていた恵瓊は、毛利氏の劣勢が明らかになると、天正10年（1582）秀吉の備中高松城攻めの際、毛利と秀吉の講和を成立させた。なお難航した両国割譲・人質派遣問題も毛利氏の重臣を説得して解決させた。秀吉はいわゆる「中国大返し」を敢行し、天下人への道をひた走ることになる。

これにより、恵瓊は秀吉の信任を厚くし、毛利氏の使僧の性格を残したまま秀吉の側近として活躍するようになる。天正13年（1587）には伊予（愛媛県）で2万3千石（後に6万石）、北九州で3千石の所領を与えられ、豊臣政権下の一大名ともなる。文禄・慶長の役では秀吉の命で朝鮮に赴き、戦闘にも加わった。

秀吉の死後、徳川家康に近づいた毛利家内部の吉川広家と対立するようになった。関ヶ原の戦いでは石田三成と組んで、毛利輝元を西軍の主将に迎えることに成功するが、広家や小早川秀秋の裏切りで戦いに破れた。

逃亡先の京都で捕えられた恵瓊は、石田三成、小西行長らと共に大阪・堺を引き回され、慶長5年（1600）10月1日六条河原で処刑された。享年63歳とも64歳ともいわれる。墓は建仁寺にある。

一方、慶長3年（1598）東福寺住持ともなり、現存する建仁寺方丈、不動院金堂・鐘楼・山門、巖島大経堂、備後安国寺釈迦堂をはじめとして多くの寺社の建造物を創建・移築して復興に努めた。まさに動乱の中を生きた政僧の代表といえる。





